

摂食・嚥下訓練が遷延性意識障害患者の意識賦活に及ぼす効果について

○浅野 さつき、兼松 由香里、石山 光枝、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院 中部療護センター

【はじめに】中部療護センターでは、意識賦活を目的に摂食・嚥下訓練を行っている。遷延性意識障害患者の嚥下訓練が意識賦活に効果があるか否か、長期にわたって調査した報告は少ない。また、当センターでは今までに遷延性意識障害患者の嚥下に関する看護研究を発表してきたが、事例発表に留まっている。そこで、意識障害レベルが重症の患者における嚥下訓練の状況と意識障害改善のレベルとの関連を検討したのでここに報告する。

【方法】対象：療護センターに平成14年12月～平成25年8月までに入院し退院した患者のうち、入院時に遷延性意識障害度評価(NASVAスコア)レベル3(47点～60点)の患者 78名
過去のカルテからNASVAスコアの改善とその項目の一つである摂食・嚥下機能の関連について検討した。

【結果】対象の平均年齢は35.1歳。4段階の評価レベル毎に改善度をみるとレベルの改善がみられたのは78人中16人(20.5%)であった。評価レベルの合計点数に改善がみられたのは64人(82%)で平均8.8点の改善があった。不変だったのは8人(10.3%)あった。合計点数が1点改善したのが12人(15.4%)、2点の改善が7人(8.9%)であった。点数の改善が多かった項目は4(認知機能)で39人(50%)に改善があり、9点の改善がみられる人もあった。項目2(摂食機能)が改善したのは41人(52.6%)でうち36人は項目2以外でも改善がみられた。

【結語・考察】意識障害の程度に関わらず継続した摂食・嚥下訓練を行うことが嚥下機能だけでなく、意識状態の改善にもつながることが示唆された。